

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390200410		
法人名	株式会社 大淵産業		
事業所名	グループホーム 清花		
所在地	熊本県八代市郡築1番町109-3		
自己評価作成日	R5. 4. 11	評価結果市町村受理日	令和5年7月12日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.gh-seika.com/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和5年4月24日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者さんがこれまで過ごしてきた暮らしを、ホームでも可能な限り営めるよう、職員は工夫し対応している。
 看護師を配置し、利用者さんのいつもと違うわずかなサインも見逃さないようにチームで連携し、利用者さんの健やかな暮らしを支えられるよう力を入れている。
 また、食にも力を入れており、国産品・旬の食材・1日30品目を意識した献立作りに気を付け、内面からの健康作りにも力を入れている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設して3年、入居者が暮らし続ける地域の中で安心した暮らしの継続に、残存能力を生かした日常生活は伸びやかで、高齢化する入居者も笑って過ごせる環境である。ホームに居ながらにして祭り(亀蛇の訪問等)や、花火を愛で、買物の代替は移動販売、季節毎のイベント・ドライブでの花鑑賞、玄関前での戸外活動等集団ケアは心身の機能維持として生かされている。また、入居者一人ひとりの思いの実現に向けた個別ケア(入浴時間・毎日自宅での仏壇参り等)はケアマネジメントの成果と言える。系列の3グループホームの連携は職員のケア向上として生かされ、働き易い環境作りにより法人が一体となって取り組み、バランスの良い職員体制が連携強化や相談しやすい環境となり、一層入居者の異常の早期発見に繋げている。地域にあるホームとして水路掃除等に出向き、近隣住民による庭木の植え替え等地域の中に浸透してきたホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念に基づいたケアをこなう為に、理念を玄関に掲げ始業時には各自確認して仕事に就くようにしている。また、職員間で理念の解釈に差が出ない様、毎月カンファレンスで話し合うようにしている。	理念を読みあげることから一日をスタートさせ、入居者の出来ることを視点としてカンファレンス時に話し合い、理念を念頭に置いたケアへの取り組みを共通認識として、ケアへの不安等立ち戻る原点として理念を捉えている。理念の一つに謳う入居者を生活のパートナーとしての位置づけは、共に生活する同士としての入居者と職員との関わりや外出時の出来事に現れ、残存能力を生かした日常が入居者の笑顔を引き出している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で地域の方とのつながりが少なくなっているが、近所の方などとの交流、また地域での清掃活動等に参加し、情報発信するようにしている。	近隣住民との挨拶や歓談、入居者と窓越しで話して下さる近隣住民、水路等の清掃活動等に参加する等コロナ禍でもできる事で地域に関わっている。また、近くに住民による植木の植え替え作業など近隣から優しく見守られたホームである。自治会長も回覧板の受渡しの相談に訪問される等地域の一員として開設3年での関わりが表われている。	管理者は、感染症が落ち着き外に出ることが出来る状況にあるが、コロナ禍に外に出ないことが当たり前になった状況を危惧されている。入居者も地域の一員として地域の中での生活が更に充実するよう大いに期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所の力を地域に貢献するまでには至っておらず、コロナが落ち着き、今年度から活動の幅が広がると思うので、地域貢献にも力を入れて行きたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の開催は文書でのお知らせのみではあったが、内容の問い合わせや、ホームからの呼びかけに協力して下さるご家族がいたり、意見交換ができ、サービスの向上に繋がっていると思われる。	運営推進会議は書面審議として資料を配付し、意見を出してもらうよう依頼している。また、全家族への配布が情報開示として生かされ、資料を見て外出先の場所の提供や、研修についてのコメントが寄せられている。また、2ヶ月間のホーム生活は入居者の姿を映し出し、活動報告、研修、ヒヤリハット・事故や予定等情報を網羅すると共に分かり易くまとめられている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村とは、様々な情報提供をメールなどで教えて頂いたり、実地調査で、現状を見ての改善点等も詳しく教えて頂き、良い関係が築けていると思う。	運営推進会議の報告書を持ち届けながらの意見交換や、介護認定更時の訪問調査に立ち会い情報交換を行っている。行政による申請書提出書類についての研修に参加する等市からのメールや電話での情報を得ている。グループホーム連絡協議会八代部会に、介護保険改正等の情報や加算の取り方の指導に行政側も参加されている。また、地域包括支援センターからの相談による入居申し込み等協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3ヶ月に1回は必ず身体拘束適正化検討委員会を開催し、虐待についての勉強会をしたり、会議でホームの現状を報告し、グレーゾーンケアなどについても話し合い、改善して行けるようにしている。	身体拘束適正化委員会での検討や、研修の他、チェックリストによる振り返り、職員の言葉がけについては職員同士が注意喚起できる環境であるが管理者は職員の口調により無理をしていないか等個別に声を掛けている。また、同法人の3グループホームで話し合う機会を作っている。転倒リスクの高い方には家族にへの説明と同意のもとセンサーを使用している。自由に自宅でのひと時を過ごす入居者等束縛の無い自由な生活環境である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ざされることのないよう注意を払い、防止に努めている	虐待の勉強会は年4回行い、知識を深める事で、自分のケア、他のスタッフのケアについて振り返りが出来ていると思う。時には他の事業所に研修に行きケアを行う事で、様々な気付きがあり、虐待防止に繋がっていると思う。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護についての勉強会に参加し、制度の理解に努めている。現在成年後見制度を利用している方もいらっしゃるが、理解し活用までにはいたっていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約については、利用者・家族のお話を伺い、不安や疑問点がないか確認しながら分かりやすく説明するようにしている。また、介護報酬改定等で変更があった場合にも都度説明し同意を得る様にしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍でご家族の面会の機会が減り、直接お話を伺える機会が減っているが、定期的に利用者の現状報告を兼ね電話連絡をする機会に、ご意見や要望等がないかお声掛けするようにしている。	家族の面会時には何でも話して頂きように声を掛け、要望等を聞き取りしている。運営推進会議の資料送付は、家族からの情報提供(外出先など)として相乗効果に繋げている。また、家族には電話にて状況を報告することで、不安軽減に努めている。	家族との交流会等の企画を検討頂きたい。コロナ禍の中では、家族と気軽に会うことも難しかったと推察される。まずは家族との交流する機会をセッティング頂きたい。今後も家族の忌憚の無い意見などを収集頂き、ホーム運営に反映されることが期待される。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフの意見は、毎月開催されるカンファレンスで確認し、内容は管理者を通し代表に伝えられ、可能な限り反映されている。	毎月のカンファレンスにより業務についての意見交換を行い、出された課題は「代表に上申する体制」としている。系列3グループホームの管理者により勉強会の計画、入居者の状況、特に看取りについての対応等検討する体制としている。職員が働きやすい環境得作りに法人全体で取り組み、3ホームがバランスの良い人員配置としたことで、連携強化や相談のしやすい環境に繋げている。管理者は日々職員とのコミュニケーションを図り、職員の意見等にまずは試みるとしており、風通しの良い関係作りに努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎年2回個人目標を立て、目標を持って業務にあたり、定期的に自己評価を行っている。管理者との面談で達成状況を確認し、職員の頑張りは評価されるシステムがあり、向上心を持って働ける環境にある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内での勉強会や外部の研修など、研修には積極的に参加する様促している。また、職場内でも、疑問に感じたことはそのままにせず、都度話し合い、分からなければ調べたりし、お互いがお互いを育て合いながら働いていると思う。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で、他事業所との交流は少なくなっているが、八代ブロック会のネットワーク等を活用し、困ったことは相談できる環境にある。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	可能な限り本人の話を聞き、困りごとの解決の為にどうしたらいいかを検討するようにしている。また、ご家族や担当ケアマネジャーなどからも詳しく話を聞き本人の居心地やすい環境を整えられる様にしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ホームに相談に来られた時に本人、ご家族の困りごとや要望等をしっかり伺い、どうする事が一番良いのか一緒に考える様に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族、担当ケアマネジャーなどからお話を聞き、状況を見極め、入居する事だけにとらわれず、他のサービス利用も含め柔軟に検討するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者、スタッフはひとつの家族という考えのもと、お互い助け合いながら尊重し合いながら生活している。本人の性格、出来る事できない事、好きな事嫌いな事様々な情報を集め共に過ごし支え合う生活が出来る様な関係づくりに励んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で面会制限をせざるを得ないこともあったが、感染対策を講じた上で短時間の面会等、可能な限り家族の面会を行い、本人にも安心感を与え、家族にもその必要性を感じて頂ける様工夫している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外出や面会等コロナ禍で制限が多くあるが電話や手紙のやり取りなどで関係が途切れない様に支援している。	コロナ禍により家族中心ではあるものの、自宅への行き来や、我が家へ仏壇参りに出かけ、晩酌等在宅生活の沿線として捉えており、自宅への外出、外泊や買い物支援(移動販売の活用)、訪問も連絡さえあれば夜間でも可としている。馴染みの場所への外出支援はコロナ禍により減少はしているものの、神社参拝やホームに居ながらにして祭り(亀蛇来訪)や全国花火大会等楽しむ事が出来ている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者一人一人の性格を含めた関係を考慮し食事のテーブルやソファの配置等工夫している。利用者同士助け合いながら、声を掛け合いながら過ごされる場面もたくさんみられている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後、他の施設へ移られたり、入院された時は、施設や病院に向いたり、電話で相談を受けたりと、利用者がスムーズに移動先でも暮らせる様支援している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	とにかく利用者の気持ちを聞く事を大切に、こちらの思い込みで判断しない様に努めている。意思の表出が難しい場合でも表情やしぐさ、家族からの情報なども含め本人の立場で考える様にしている。	入居者によっては“して欲しい”や“こうしたほうが良い”等が発せられる場合には、出来る限り希望に応えている。また、職員は入居者の思いを引き出すため、目線での会話に努め、言うことをためられる入居者には行動や表情から推察し、本人本位になるよう検討している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族、担当ケアマネージャーや、馴染の人などこれまでの生活歴や性格など可能な限り情報収集し職員で共有し、入居前の生活が継続できるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	体調不良などがあっても表出する事が出来ない方も多いため、日頃の観察が重要で、いつもと違うと感じたことは事は他の職員とも共有し現状把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の暮らしの中で気になる事や、変化は記録に残し、みんなが共有できるようミーティング等で注意するようにしている。必要に応じてカンファレンスや担当者会議など行いながら現状に即した介護計画作成に努めている。	暫定プランを作り、入居時に説明し、1ヶ月間を確認したのち、家族に説明し同意を得ている。入居者の状況(立ち上がり、立位その他、転倒の危険性等)への対応や改善策を検討し、担当者会議では家族を含めて話し合っている。介護認定期間を長期目標として、3ヶ月毎に実施状況や達成度を見極め、今後の方向性を見極めた新たなプランを作成している。安心して暮らしたいとするニーズには、無理の無い暮らしができる事等具体的なサービス計画書が作成されており、現状に即したプランである。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画に基づき、日々の様子や変化、行動の気付きなどは個別記録に残し、状態変化時必要に応じてカンファレンスを行い介護計画の見直しなどを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍で制限はあるが、できる限り本人、家族の要望に応えられるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	以前のように自由に外出などが出来なくなっているが、人込みを避けて花見に行ったり、移動販売で買い物、オンラインでライブ等地域資源を活用しながら暮らしを楽しむことが出来ている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者の以前からのかかりつけ医と連携した状態など密に連絡取りながら対応している。夜間急変時等の対応が困難なかかりつけ医もいるが、総合病院と連携しながら適切な医療を受けられる様支援している。	入居しても元々のかかりつけ医を継続し、家族による受診や訪問診療として、夜間時には電話にて相談し今後の対応を指示してもらえ等協力関係を築いている。職員の日頃の健康チェックに加え、看護職員が2名体制となった事で、これまで以上に異常の早期発見や対応に繋げている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師2人体制を確保する事で、日頃の健康観察が十分に行え、状態変化時もち早く気づき早期に病院受診等対応する事が出来ている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院となった場合、職員も同行し病院関係者にホームでの様子について申し送り安心して入院できるよう支援している。状態が安定し退院可能になれば積極的に退院を受け入れる様にしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期の事に関しては、本人・ご家族と協力医と早い段階から話し合いの機会を持つようになっている。方針が決まったら、職員間でも情報共有し、看取りについての勉強会なども行い、チームで支援できるようにしている。	入居時に医療連携体制指針や終末期について説明し、本人や家族の希望があれば看取りまで支援できることを説明している。また、プランの見直し時には事前指定書による説明と新たに同意書を取り直している。主治医と家族及びホーム側で話し合い、状況に応じ居室の交換や感染対策を施した上で家族との一時を過してもらっている。ほとんどの家族が最期までホームでの生活を希望されており、支援後は同法人3グループホームの報告会で、故人を偲ぶとともにケアを統一している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応について定期的に研修を行っているが、いざという時に慌てないでいい様に対応している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害・火災訓練については定期的に実施しているが、コロナ禍で地域住民や家族の参加での訓練は出来ておらず、協力体制が築けているとは言えない状況。開催が可能になれば早期に実施していきたい。	火災を想定した自主訓練では入居者も職員と共に駐車場へ避難している。災害時の備蓄品をチェックし、不備品や食品については情味期限を確認している。自然災害時における夜間1名時の対応について検討し、防災及び感染症マニュアルを作成しているが、防災マニュアルについては更に具体的にする必要があるとされている。	BCP策定については早期に進めたいとしており、マニュアルの見直しを含め、全職員での取り組みに期待したい。また、備蓄についてはチェックリスト(一覧表)の作成を検討頂きたい。欠品や期限の確認が容易に出来ることと思われまます。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	チェックの芽シートなどを活用し、自分のケア声掛けを振り返り、利用者の人格の尊重プライバシーを確保できる様にしている。また、職員同士ケアで気付いた事はメモに記しお互いがお互いを注意したり褒め合えたりし、より良いケアに繋がるよう工夫している。	入居者一人ひとりを尊重し、尊厳のある生活とするためにチェックの芽シートを活用し、ケアの振り返りを行っている。呼称は入居時に家族に確認し、苗字や下の名前、若かりし頃呼ばれていた仕事上の呼び名等で対応している。入居者への声掛けや腰を下ろし目線を合わせた会話に努めている。個人情報保護として家族と同意を交わし、職員にも情報を漏洩しないよう徹底している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員が勝手に決めることなく、利用者に意思確認するように意識している。また、表出が難しくてもはい・いいえで答えられるような質問で尋ねるなど、出来るだけ本人の意思に沿った支援が出来る様にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者一人一人の生活リズムにあわせて、どうした以下の選択は本人の希望に添える様意識して支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服装は自分で選べる方は自分で好きな洋服を選んで頂いている。髪の毛のカットについては美容師が来て対応してくれているが、髪型やカラーについても本人の希望、ご家族の要望を聞きながら対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事には力を入れており、国産品・旬の食材・品数多くを意識した献立になっている。献立は利用者の希望も取り入れ、準備や片付けが出来る方は一緒に、できない方にも食事の内容や調理過程を話したりして一緒に食事の時間を楽しみに過ごしている。	入居者の好みを反映した献立を立て、食材にこだわりを持ち、肉・魚を専門店より、野菜等は地元商店に買い出しに出向いている。食を楽しむとする入居者はできる事で食に関わり、時間をかけてゆっくりと食べてもらうように見守り、“秋の彼岸入り”を教えてくれる入居者の声にあわせておはぎを手作りする等食を通した関係性が出来ている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分摂取量の把握を行い、不足している時には細目にご飯・補水を促したり、定期的に体重測定を行い体調管理に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時・毎食後に口腔ケアの声掛けし、口腔内の清潔保持に努めている。自立の方も時々口腔内の確認を行い、適宜仕上げ磨きの介助をしたり、必要時歯科受診に繋がると、歯科医師とも連携し対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	リハビリパンツ使用の方が多く、可能な限り布パンツで過ごして頂ける様、日中は布パンツ使用し夜間はリハビリパンツ等で対応している。排泄はトイレでして頂ける様夜間も状態観ながらトイレに案内している。	入居者の排泄間隔やその日の状態を見ながら声かけや誘導によりトイレでの排泄を支援している。日中は可能な限り布パンツで過してもらい、夜間もリハビリパンツにパットを併用して、入居者の様子を見ながらトイレに誘導する等トイレへのサインを見逃さず、早めの誘導に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	なるべく自然排便が促せる様、毎朝手作りヨーグルトを提供している。水分摂取量や食事内容も気を付けながら個人に応じて、きな粉を提供したり、腹部マッサージを行ったり個別な対応を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴したいタイミング時間帯で入浴できるように支援している。季節に応じて柚子や菖蒲、晩白柚を浮かべたり、拒否が強い方へは、脱衣所で音楽を流してみたり個々に応じて工夫し対応している。	入浴時間を午後からとして週に2~3回しているが、自宅で入浴していた時間を希望する入居者には入りたい時間で入浴として毎日夕方入浴を支援している。入浴を拒否される方には音楽をかけて誘ってみたり、病院受診を理由に声を掛けている。無病息災を祈願した菖蒲湯や、冬至の柚湯の他、この地ならではの晩白柚等も使用し、季節感を出している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の体力に応じて日中の活動を工夫し夜の安眠に繋げている。入床前はリラックスできるように温かい飲み物を提供したり、冷え性の方には湯たんぽや電気毛布で布団を温めておく等工夫し対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬事表ファイルを作成し職員間で共有するとともに、薬の袋にも個人ごとに薬の情報を明記し、利用者の服薬している薬剤の用法・用量・副作用が確認できるようにしている。また、状態と照らし合わせ、不必要な薬を服用していないか考える様に気を付けている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物を畳んだり、テーブルを拭いたりといった日常生活での役割をホームでも継続して行えるよう支援している。また、コロナの状況を見て、家族とのお出かけや、ドライブなど出来る範囲での楽しみごとを見つけ気分転換が図れるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日は園庭で日光浴を楽しんだり、人混みを避けて、初詣や花見などお出かけするようにしている。また、なかなか買い物にも行けない状況があり、地域のスーパーに相談し移動販売に来て頂いたりしている。	入居者の“何処に行きたい、日なたぼっこをしたい”等の思いに応え、天気の良い日には庭先に椅子を出して輪になって日光浴を楽しみ、感染状況をにみながら初詣や季節毎に花見学に出かけている。全員での外出は難しい状況には3日に分けて桜の見学に出かけ、同行できなかった職員へのお土産も忘れない入居者の姿に、ホームの入居者と職員との関係が表われている。系列グループホームでのジャガイモ掘りや家族とのドライブなど外出を支援している。	買物支援の一環としての移動販売の活用や、外出に代わるカラオケ大会、お月見等工夫している。以前はバス旅行も行われていたが、コロナ禍の中では中止せざるをえない状況であったが、代表がらはバス旅行再開に向けた声も上がっている。平均年齢も90歳を超えており、今できることの一つとして家族との旅行が実現できるように、話し合いを重ねて頂きたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理が出来る利用者は自分でお金を持ち移動販売の時などに買い物をしたりしている。管理が難しい利用者も買い物の楽しみを継続できる様、職員と一緒に買い物を楽しめる環境にある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電を所持している方は、ご家族との電話を楽しみにされている。また、ご家族から電話がホームにあった時は本人に取り次ぎ、いつでもお話して頂けるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間は常に清潔に保たれるよう、清掃・除菌に気を付け対応してきた。生活感や季節感を取り入れる為月ごとに掲示物を作成したり、出かけた時の写真等も飾り、ぬくもりのある空間づくりに努めている。	感染症対策に換気や掃除を徹底し、入居者が一日の大半を過ごすリビングは清潔且つ安全に生活出来るよう心掛けている。入居者はテーブル席やソファ等で会話で楽しみ、来訪者をもてなしながら過ごされている。リビングや廊下には季節毎に飾り付け、外出時の写真の掲示は入居者同士の会話のきっかけとして生かされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファの配置やテレビ、テーブルの位置などを工夫し、みんなで過ごす時間・一人で過ごす時間思い思いの場所で過ごせるような環境づくりに努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者、家族と相談し家具の配置を決めたり、馴染みのものがあれば持参して頂くようお願いし、これまで過ごした環境に近づける様工夫している。	入居時、持込みについては馴染みの物、家具や椅子の他、写真等があれば入居しても寂しくないかと家族に依頼している。入居者の動線や使い勝手を考慮し家族と配置を決定したり、入居者の部屋でテレビを見たいとの希望には家族に依頼したり、居室に畳を入れた居室など入居者が住みやすい住環境としている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	できる事・できない事を把握し、出来るだけ自分で出来る様支援し、できない事にはどうしたら出来るようになるのか検討し工夫して対応している。		